

紹介

R・A・スタン著

山口瑞鳳・定方晟訳

チベットの文化

本書は、名著の誉高い、コレージュ・ド・フランスの教授スタン氏 Rolf Alfred Stein, *La civilization tibétaine*, Paris, 1962 の全訳である。スタン氏の略歴は、本書の「訳者あとがき」に記されているので、ここでは詳しくは述べないが、要するに、中国、チベットの文化の民俗学的、宗教学的方法による研究者として若年のころより業績をあげ、特にチベット学者としての高名を謳われていることを述べれば十分であろう。本書も氏が優れた民族学者、宗教学者であることをそのまま示すような興味津々たる内容のものである。氏は本書の執筆にあたり、「これまで出版された書を要約したり、どこでも読めるようなことを繰返すのは避け、できる限り、チベットと中国の原典を利用し、新しい事実を紹介するのに力点をおいた」という（まえがき五頁）。確かに本書はその意味で、訳者も指摘

するとおり、「専門家にとっては出発点となり、近接学科の人々にはチベット学の決算報告的なもの」（訳者あとがき三四六頁）といつてよい。原著が山口、定方両氏の努力によってここに邦訳され、我々に一層利用しやすいものになったことを読者とともに喜びたい。以下内容を簡単に紹介しよう。

第一章「土地と住民」は、主として歴史的に存在した諸民族の名称、その居住地などを説明しているが、「チベット人の国土観」という節では、チベット人が自らを野蛮な愚かな民族であったとし、それが仏教の流入によって優れた民族に昇華したことを言い、それは中国などの場合と全く異っていることが指摘される。

第二章「歴史の概観」は七―九世紀の古代王朝、それ以後のラマ教会権力の形成に大別されるが、最後にチベットの現状について、「周囲の大国は勿論、チベット人自身もチベットの独立を宣言することを望まず、チベットは近代世界の中にあることを自らを平然と中世的体制に縛りつけたまま全く順化の努力を行わなかった」とし、「突然起った変化に徐々に対応してゆくことを知らなかったため、滅亡に瀕した一文明の悲劇である」とするのは（八六頁）、筆者も

同感である。

第三章「社会」の一節「生活形態」では、チベットは遊牧が主か、農耕が主かという従前からの命題が取上げられ、氏は歴史的文獻を精査し、基本的には農耕社会であると結論づける。資料の吟味、利用の方法は適確で、本書中、筆者の最も興味をそそられ、頷かされた部分である。

第四章「宗教と習俗」では、従来の考えではチベットの宗教はラマ教と、それに先行するボン教の二つが存在していたとされるが、氏は、チベット人が最初から持っていた伝統的觀念、習俗の総体即ち「人の宗教」*Ni chos* を推定し、これを基礎にボン教、ラマ教などの「神の宗教」*Lha chos* の存在を考えている。この章は氏の宗教学的、民俗学的素養の深さと、それぞれの宗教についての広い知識を遺憾なく發揮した部分で、全く氏の独擅場といつてよい。特に行事の風習またはボン教などのうちにイラン的な影響まで見出しているのは（二三七頁、二六〇頁）さすがである。

第五章「美術と文学」もまた氏ならではの文字である。古代の詩を敦煌文書に探り、中世のそれをミラレバの詩などを利用して述べ、演劇を語り、叙事詩として最も氏の

得意とするケサル王物語を紹介する。美術の節では塑像、絵画などを論ずるが、コータン系(三二五頁)、古代イラン系(三二八頁)の影響とともに、グレコ・ブディック系(三二八頁)、スキタイ様式(三三一頁)の影響まで指摘されているのは氏によって初めてなされたものであろう。

以上で内容の紹介を終るが、実はチベットの文化の研究には難問が多い。歴史、宗教、文学、民俗などのどの分野をとっても、研究が高いレベルに達しているとはいえないのが現状である。一つの分野だけでも研究は困難であるのに、これらすべてに通じ、しかもこれ程のスケールで全体を論ずることのできるのは、氏の並々ならぬ学力と精進を物語っている。現在のチベット学の大宗を知る好個の文献として本書を推薦したい。

介
なおこのような専門的な書を、力を尽して翻訳、紹介された山口、定方両氏には更めて敬意と感謝を献げねばならない。というのチベット物の邦訳には、チベット語の初歩も知らないために、反って研究者を惑わすものが余りにも多いからである。ただ本書の場合、できれば、翻訳に際して、どのように両氏の間に責任が分担されたの

かということだけはあとがきに明記して戴きたかったと思う。

(A5判、本文三四六頁、索引、註、参考文献三八頁、昭和四六年一〇月、岩波書店刊、定価一五〇〇円)

(佐藤長・京都大学教授)

会計部より

会費の値上げについて

本会会費については、さきにお願ひしましたように五四卷一号より、年間一八〇〇円(一号当り三〇〇円)になりましたが、その後も、印刷代、郵便料金等の大幅な値上りをうけ、現状では史林発行のたびにマイナスになっております。本会としては、史林の定期発行を最大の目標とし、他の経費を出来るだけ節減するよう努力しておりますが、このままでは、史林の発行すらあやぶまれて参りましたので、理事会、評議員会の決議により、次の通り値上げの止むなきに至りました。諸般の事情を御賢察の上、御了承下さいますよう、お願い申し上げます。

記

旧会費 年間一、八〇〇円

(一号当り三〇〇円)

新会費 年間二、四〇〇円

(一号当り四〇〇円)

旧定価 一号当り三五〇円

新定価 一号当り四五〇円

(樋口隆康)

史 林 (第五五卷第二号)

一九七二年 二月二五日印刷
三月一日発行 定価三五〇円

発行人

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

史 学 研 究 会

理事長 羽 田 田 明

印刷所

京都市下京区七条御所ノ内中町五〇
中村印刷株式会社